

## 人と水のシリーズ2 「清原太兵衛」

# 三分野の力作同時に

「佐陀川開削に心血・清原太兵衛」功績をたたえいかだ下り」。これは過日、山陰中央新報紙で報道された新聞記事の見出しである。島根県鹿島町は平成八年度が町の合併四十周年に当たることからいろいろの記念事業を行っている。



今回、出版された小説「清原太兵衛」も懸賞に応

「佐陀川開削に心血・清原太兵衛」功績をたたえいかだ下り」。これは過日、山陰中央新報紙で報道された新聞記事の見出しである。島根県鹿島町は平成八年度が町の合併四十周年に当たることからいろいろの記念事業を行っている。

成の四十年後のことである。飢饉(きん)に苦しむ農民たちによる天明の打ち壊しが全国に及んだ年でもあった。

「新しいことをやる時には敵半分味方半分…」人間、志を持ち続け、努力し続けることが大切であるぞ」

「今日の日評価を受けるものは、明日の日には消えるものよ」これは終わりに近い部分で三人の作家が登場人物に語らせている言葉である。世を去る直前の太兵衛の言動にも、作家それぞれの熱い思いが込められており圧巻である。

三冊の本を読み比べてみれば、内容がそれぞれ多少違っているのに気づく。それは詳細な記録に基づいた記ではなく、創作の世界であるから当然のことといえるが、そこに読むことの楽しさがあることも確かである。

五)年から七年の秋にかけて松江藩の普請により開削された川である。その中心から別の排水路を造るしかなかった。

これには先見の明をもち、開削の必要性を訴え続けていた太兵衛の策が採用された。周囲の抵抗もあったが、工事は三年の計画で進められ、天明七年に完成した。太兵衛七十六歳のときであった。周藤弥兵衛による日吉村切り通し工事完了を感じさせる。

古希を超えた下級身分の老役人が一生の仕事と、自らに言い聞かせた計画を何度となく藩に申し出る熱意には心打たれるものがある。その熱意と誠実さが開削完成の前年に身分を武士に昇格させたものの、それに甘んじることなく、工事の遂行に全力を注ぐ姿に念に生きる人間の偉大さを感じさせる。

「人と水のシリーズ2 清原太兵衛」は、HNS(人間・自然・科学)研究所刊。▽漫画「治水の偉人伝 清原太兵衛」(小室孝太郎著・一三〇〇円)▽児童文学「川を作った人 清原太兵衛」(村尾靖子著・一三〇〇円)▽小説「治水の偉人 清原太兵衛」(寺井敏夫著・一四〇〇円)の三部作。

(錦田唯雄)島根県学校図書館協議会会長

# 読書